

## 美しき清流は太古の森の雫より

### 第六話：若鮎の巻き（六枚屏風編）

前日から威勢のいい雨が降りしきる深夜 2 時過ぎ、待望の鮎が拝めるとあって、くちぶえ高らかに富士の麓に広がる樹海の中を大河に放たれた野鮎の如く静岡県興津川に向けて車を走らせていた。

雨は降れども気分満天、富士川を渡れば興津は目と鼻の先、茂野島を過ぎて山びこ橋上流の河川公園で朝を迎えることとした。

雨足は少しずつ弱くなり、辺りが明るくなる頃には雲も薄くなっていたが前日までの降雨により直ぐに竿を出せる状況ではなかった。

同行の仲間達も呆然と川を見つめるばかりであった。

「シラニちゃん、午後からだべー」

「この濁りなら半日も待てば底が見えるようになるから、それまで宴会すんべー！」

「よしゃ買出し行くぞー」

前日から睡眠ばっちりの「チャラ三郎」は一人元気に、飲みねー、食いねー、江戸っ子だってねー、秋川の生まれよ！と宴会部長と化していたのであったが、普段から不摂生の若い衆は煙たい顔して爆睡モードに突入していったのであった。

「一人ドンちゃん騒ぎ」

それから三週間、待ちに待った秋川解禁、久々に母なる川に来てみたものの六枚屏が雨に霞んで今日も鳥肌立つ夜明けになってしまったのであった。



「こんな雨じゃあ誰も釣りなどすまい」と思いつつも引田橋から様子を見てみると、なな・・なんと、どのポイントにも大勢に釣りキチ達がひしめいているではありませんか。

それぞれが狙いを付けたポイントで竿を出しているのを遠く引田橋から望んでいた「チャラ三郎」であったが、瞬く間に雨足も強まり、またしても自宅庭先で秋川を眺めながらお神酒を上げる事になってしまったのであった。

降りしきる雨を言い事に神酒が進み、全員バタンキューと高いびきの大マグロと化してしまっていたのであった。

《それから数時間経過》

若い衆が爆睡している中、酔いから覚めた「チャラ三郎」は唯一人、勇んで罎やに駆け込んだものの既に4時過ぎ、六枚屏風目掛けて一目散に川に込んでいったのであった。

川下に正座した「チャラ三郎」が罎を上流に向けてゆっくりと放ちます、一呼吸おいて上糸に小刻みに付加をかけると罎は水流に負けないように尾を振り、ゆっくりと上流に進んでいきます。

その瞬間、目印がすっ飛んでいき秋川での初鮎が「チャラ三郎」に伝えてくれました。結局、1時間で納竿となりましたが10本まとめは“アツパレ”大沢親分と如く大満足のチャラ三郎でした。

【チャラ三郎秘伝： 酔拳の術】



チャラ三郎が鼻歌交じりにかえってくると、朝から酒がっくらっていた若い衆たちは目

をパチクリさせながら「あれだけ呑んで、行ったんですか？」

「あた坊よ。 こう見えてもチャラ三郎、唯の酔っ払いとは ちと違うで……」

「あれはお神酒よ、」の一言に、若い衆は返す言葉も無く撃沈の巻き。



【六枚屏風】30年前は秋川を代表する鮎釣りポイントとして賑わっていましたが、今ではその賑わいはありません。

清流を取り戻し鮎師で賑わう六枚屏風をもう一度。

「秋川チャラ三郎」